Osaka University Knowledge Archive

Title	日本語疑問文における判断の諸相
Author(s)	安達, 太郎
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3109869
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【5】

氏　　名	安達太郎（あだちたろう）
博士の専攻分野の名称	博　士（文学）
学位記番号	第　12242　号
学位授与年月日	平成8年2月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科　日本学専攻
学位論文名	日本語疑問文における判断の諸相
論文審査委員	(主査) 助教授　仁田　義雄 (副査) 教　授 J.V.ネウストプニー　　教　授　真田　信治

論文内容の要旨

日本語の研究でこれまで中核的位置を与えられてきた分野の一つにモダリティという文法カテゴリーがある。これは，日本語が話し手の主観性すなわち「判断」を言語形式や文法現象に反映させることが多いためであり，この点で，日本語は「判断」を高度に文法化した言語であると言われることがある。

日本語における「判断」の研究は，当然，言語形式として固定化した平叙文の文末のモダリティの諸形式の分析からはじめられてきたし，この方向の研究はこれまでにかなりの成果を挙げてきた。しかし，話し手の「判断」が関わるのは，このように言語形式化されたものだけとは考えられない。今後の研究は言語学的に意味を持つ範囲で，より繊細な方向に進展していくことが望まれよう。

そこで，本論文は，次の二つの問題意識から出発している。(1) 平叙文ではなく疑問文における「判断」の実現のあり方をさぐる。(2)「判断」の実現のあり方，すなわち文法化に段階性を認める。

このような観点をとることによって，広義のモダリティ研究の文脈の中で疑問文に関わる諸問題を捉えることが可能になってくる。このような問題は，これまでのモダリティ研究の射程には入ってこなかった問題である。

この論文を通しての課題は，(1) 聞き手から情報を引き出す際に，話し手の「判断」がどのように投影されるのか，(2) 平叙文において文法化された「判断」としての認識的モダリティの形式がどのようにして疑問文の中に実現されるのか，(3) 疑問文が属している伝達のレベルから平叙文における判断のレベル（認識的モダリティ）へ，あるいはその逆方向へのレベルの移行，の三点にまとめることができる。

本論文は，8章からなり，さらに，結論にかえて結語を付してある。

第1章と第2章は本論文の序論をなすものである。第1章「本研究の目的といくつかの前提」では，平叙文における「判断」としてのモダリティの研究とその問題点を明らかにすることによって，上に述べたような問題意識を設定し，本論への導入とした。第2章「形式についての概観」では，本論文で取り上げられる疑問文の四形式，すなわち否定疑問文，確認要求の「ダロウ」，「ノデハナイカ」，「デハナイカ」に関して，どのような点に注目して分析を進めていくべきかという問題のありかを明確にすることを試みた。

第3章以下が本論である。

第3章「疑問文による情報要求と情報提供」では，主としてレベルの移行という第3の課題に関連して，疑問文が平叙文としての機能を果たすという現象について考察を加えた。本来，疑問文とは話し手が必要としている情報を聞き手から引き出すという機能（情報要求機能）を持つものであるが，疑問文のうちのあるものには，その逆に，聞き手に対して情報を与えるという平叙文的な機能（情報提供機能）を持っていると考えなければならないものがある。本論文で扱われる形式の中では，ある判断への「傾き」を持つ否定疑問文と「ノデハナイカ」にこのような機能を認めることができるが，ここでは，「ノデハナイカ」を取り上げて，その情報要求機能を明らかにする現象（イントネーション，感情述語の主体の遷移の現象など）と情報提供機能を明らかにする現象（モダリティの副詞の共起，思考動詞の補文への生起，応答文としての使用など）を検討した。また，「ノデハナイカ」と確認要求の「ダロウ」との機能の相違，ストラテジー的使用としての待遇的用法の存在を指摘した。

第4章「認識的モダリティとしてのノデハナイカ」では，前章の議論を受けて，情報提供機能を認められる「ノデハナイカ」を認識的モダリティの中に位置づけていくという作業を通して，その意味的特徴を取り出すことを試みた。「ノデハナイカ」は，他のモダリティの形式とはいずれも共起することが難しく，モダリティ的な意味を持つ副詞とはいずれも共起することができるという点で，これまでに設定されてきたモダリティのどの類型にも適合しないという性質を持っていることが明らかになった。これは新しい類型を設定することの必要性を示唆するものと思われる。また，意味的には，命題に対する低い蓋然性を表わす「カモシレナイ」と類似した機能を持つものとして用いられることが多いが，「カモシレナイ」が一定の判断への関与を前提とするのに対して，「ノデハナイカ」では，この形式が本来疑問文であったことの反映として，それが含意されないという相違が存在する。さらに，同様の情報提供機能を持つ否定疑問文との機能的な差異を検討することによって，疑問文の成立条件に関して新しい知見が得られることを示した。

第5章「否定疑問文における「傾き」について」では，疑問文の中に話し手の「判断」がどのように投影されているのかという第1の課題を解明していくために，疑問文本来の機能である情報要求として機能する否定疑問文を取り上げた。話し手が聞き手から情報を引き出そうとする際に，意味論的には等価であると考えられる肯定疑問文でなく否定疑問文を用いるのには，なんらかの動機が必要である。この点で否定疑問文は有標な疑問文であると言えるが，その有標性を満たす一つの手段が，ある判断に対して話し手が中立的な態度を持たず，いずれかの方向への指向性を持っているということである。これがしばしば「傾き（bias)」と呼ばれる現象である。この章では，「傾き」を疑問文での「判断」の実現の一現象として考えるが，「傾き」は，記憶検索の副詞「確カ」と共起することなどから，日本語においては含意といった性質のものではなく，話し手の「判断」がある程度の文法化を遂げているものとして捉えることができるのである。さらに，「傾き」が文の意味としてどのような条件がそろったときに成立するのかということを検討し，これを手がかりとして，「傾き」に二つのタイプがあること，対話における否定疑問文の使用条件として推論の非現場性ということが挙げられることを明らかにした。

第6章「確認要求と疑問文の条件」で検討を加える確認要求は，不確定性条件と問いかけ性条件という疑問文の二つの成立条件の中から，命題内容が不確定的であるという条件が欠落したものとして設定されてきた。したがって，「デハナイカ」と「ダロウ」という確認要求の二つの形式の機能の相違に対応させて，これらの内部に認識的モダリティの形式がどのようなかたちで実現することができるか，という第2の課題を取り上げることが可能になる。ここで鍵になる現象は伝聞形「ソウダ」に対する両形式の文法的振る舞いの違いであり，伝聞形と共起しない「ダロウ」に対して，「デハナイカ」は伝聞形とも共起することができるという事実を指摘した。伝聞形は，疑問文中に実現することが非常に困難であるという特徴を持っていることから，その帰結として，「デハナイカ」は，すでに疑問文としての性質を失っており，平叙文への移行をおえているということが導かれる。これは，感情述語の主体の遷移の現象を「デハナイカ」が示さないこと，また「デハナイカ」が様態の「ソウダ」と共起することが可能であるといったことによっても，支持を与えられるものである。

第7章「デハナイカによる聞き手の知識の活性化について」では，前章に引き続いて，「デハナイカ」を取り上げた。この章で問題とするのは，「デハナイカ」の確認要求的な機能（聞き手の知識の活性化の機能と呼ぶ）がどのようにし

て派生されるのか，ということである。先行研究を手がかりとして「デハナイカ」の用法を整理し，これに対して，聞き手の存在を前提とするか否かという観点を付け加えることによって，より妥当な説明を与えることを試みた。知識の活性化という機能は，話し手が聞き手の知識に対して持つ想定と聞き手の現場的な知識とのギャップを埋める，というところから派生してくるということを述べ，この仮説によって，眼前描写的な文に「デハナイカ」が付加される場合に対して，従来よりも細かい含意まで説明できることを指摘した。

第8章「判断から伝達へのレベルの移行－ダロウの場合－」では，確認要求的な疑問文を代表するものとして「ダロウ」の機能について検討を加えた。これまでにもしばしば議論されてきたように，「ダロウ」には相互にどのような関係があるのか明らかになっていない二つの意味があることが知られている。一方は推量と呼ばれ，認識的モダリティとして位置づけられており，もう一方は確認要求と呼ばれ，疑問文の下位類型の一つとして位置づけられている。この二つの意味を捉えるためには，これまでに一つの中核的意味を設定し，両者をこれからの派生として捉える見方と，一方をもう一方からの派生として捉えるという見方があるが，本論文は後者の立場をとる。具体的には，判断（推量）から伝達（確認要求）へのレベルの移行という観点から，「ダロウ」の機能の全体像を把握することを目指す。この観点にとって手がかりになるのは，文法カテゴリーとしての丁寧さの分出であり，これにしたがって，「ダロウ」の意味は判断レベル，中間段階としての判断・伝達レベル，伝達レベルという三段階として，連続的に分析される。

最後に結語として，本論文が日本語のモダリティ研究において占める意義について簡単に述べ，今後の展望を示して，この論文のまとめとした。

400字詰め約500枚

論文審査の結果の要旨

モダリティ研究の領域は，日本語文法の研究にあって，近年精力的に分析・記述が行われ，研究が大きく進んだ領域である。このような領域において，重箱の隅をつつくような分析・記述ではなく，領域の研究全体を推し進め，研究に新たな地平を拓く可能性を持った分析・記述を呈示することは，なみたいていなことではない。本論文は，このような困難な研究領域において，問題そのものを捉え直し，領域の研究全体を推し進め，新しい分析・記述の方途を呈示し，そのことによって，研究領域を新たに切り開くことに成功している。

このことが可能になるためには，分析・記述がきめ細かくかつ有機的関連を持った体系的なものであること，呈示された分析・記述が説得的であること，そして，そういった豊かな記述が，明確な問題意識，および，それから導き出される新しい考察の視点によって，行われたものであること，などが，その前提となってこよう。

本論文の最大の貢献は，聞き手の知識を活性化させる機能を持つ様々な確認要求の文が示す多様な文法現象が，極めて豊かにきめ細かく分析・記述されていることである。いままで記述されていなかった文法現象が発見され，分析を施され，記述されていくことが，文法の研究にとって，まず基本であり，中心的課題である。本論文は，この中心課題において，優れた成果を収めている。

本論文では，的確な実例が豊富に集められている。そのことが，本論文をして，文法現象の豊かできめ細かい分析・記述を可能ならしめている。用例の多様さを持て余すことなく，それを生かすことのできる，行き届いた観察と体系的で組織立った分析・記述の進め方で，集められた用例に周到な検討が加えられている。そのことによって，従来気付かれずに打ち捨てられていた言及すべきあるいは言及する価値のある様々な現象が掘り起こされている。たとえば，洋服を買いにきたAとそれに付き合った友人Bとの会話で，［B「その服，いい｛んじゃない／#でしょ｝？」A「いい｛でしょ／#んじゃない｝？」］や［A「ねえ，この服，いい｛んじゃない／でしょ｝？」B「うん，いい｛んじゃない／#でしょ｝」］の使い分けの指摘に見られるように，きめの細かい分析が行われている。また，きめの細かい分析・記述の背後には，行き届いた観察を可能ならしめた論者の鋭い言語直感がある。

さらに，丹念なきめの細かい分析・記述が単なる羅列ではなく，組織立ったあり方で有機的に連関付けられている。こ

のことが可能になっているのは，考察の対象が，確認要求に関わる形式というふうに，拡散せず十分に絞りこまれたものになっており，しかも，それらが，判断の実現のあり方を軸にして，考察されていることによっている。

考察の対象となる現象が絞りこまれている，ということは，分析・記述が狭いといったことを，直ちに意味しはしない。本論文では，確認要求の形式を多角的かつ正確に分析・記述していく，という目的を遂行する中で，確認要求の形式と関わり合いを持つ「モダリティの副詞」や「終助詞」や「認識のモダリティ形式」などの諸特性が明らかになっている。

文法分析・記述をなすにあたっては，統語的証左を差し出しながら行うことが重要であり基本である。本論文は，文法分析・記述の基本に従って，統語的証左を丹念に提出しながら分析・記述を行っている。また，統語的証左の提出には，豊富に集められた用例が有効かつ的確に使われている。そのことが，呈示された分析・記述および立論を説得力のあるものにしている。

本論文は，文法形式としての固定化あるいは実現の度合，つまり文法化に程度性が存する，という立場に立ち，言語形式とそれが担う意味・機能の結び付きを静的・固定的に考えず，言語形式の意味・機能を文構造や状況の中で動いていくものとして捉えている。さらに，言語形式と機能との関係を柔軟に捉えながら，中核となる現象と周辺的な現象を峻別し，中核となる現象から取り出された機能の応用として周辺的な現象を位置付け解釈するという立場，論者の言う「弱い機能論的仮説」の立場に立って考察を行い，疑問文形式の平叙文化および「ダロウ」の意味のレベル移行を明らかにしている。

もっとも，本論文で提出された分析・記述およびそれに対する説明について，疑問のない箇所もないではない。また，判断の実現のあり方といったものを軸に，疑問文の平叙文的機能の獲得が描き出されているが，もう少し平叙文そのものの多様なあり方への記述があってもよかった。

しかし，上述したような点は，本論文全体の価値を損なうものではない。本論文は，判断の実現，情報のやりとりといった観点から，疑問文，平叙文について新たな考察を加え，疑問文から平叙文への移行を動的に生き生きと描き出しながら，モダリティ研究の領域に様々な新しい知見を提供している。本論文審査委員会は，本論文を博士（文学）の学位申請論文として，十分な価値を有するものと認定する。